「イエスとの友情を生きる霊性・祈り」 カルメル会の霊性から

カルメル修道会 中川博道

【略記号】：「V」＝『自叙伝』、「C」＝『完徳の道』、「M」＝『霊魂の城』（例１M3・6＝霊魂の城第 1 の住居 3 章 6）

「F」＝『創立史』

カルメル会のカリスマの源泉を、教会は聖テレジアとみなしている。しかし同時に、カルメル会は、聖テレジアと十字架の聖ヨハネを霊的両親と受け止めている。この二人を、新約聖書になぞらえて、聖テレジアの体験と教えは福音書にあたり、十字架の聖ヨハネの体験と教えをパウロの書簡のように解釈することがある。現代の霊性の師といわれる二人の教会博士※の経験と教えに近づくことは、カルメルの霊性を理解するために、どうしても通らなければならない道である。その中でも、カリスマの源泉となった聖テレジアの経験と教えの中に、カルメルの霊性の原点・中心点があると言える。聖テレジアは、そうした体験の中から、霊性史上、一つの頂点をなす祈りの定義を残した。「念祷とは､自分が神から愛されていると知りつつその神とふたりきりでたびたび語り合う友情の交換である」（Ｖ8・５）。神との友情の深まりが神との出会いの中心にあることが際立っている。

Ⅰ.カルメルの霊性とカリスマの源泉となる聖テレジアのキリスト体験の中心にあるもの

# テレジアの祈りの歴史

テレジアの神との出会いの経験を整理して理解するために簡単に彼女の祈りの歴史の概要を整理する。テレジアの念祷の歴史の中に三つの時期を区別することができる。

【第一の時期】：容易に､そして自然にできる念祷。テレジアは念祷を発見する（cfrＶ1）。

【第二の時期】：青春の危機から 1554 年 39 歳の決定的回心に至るまでのむずかしくつらい念祷（Ｖ１）。

彼女のおぼえる困難は二つの理由から来ていた。すなわち、いっぽうには悟性を用いて考えることができず､また想像力も彼女の意のままにはならなかったこと（Ｖ4・8－9;9・4）。

他方には思いきって徹底的な愛の道に入ることができず､彼女の生活には矛盾のあったこと。彼女はこの時期について､「私は霊的生活とその慰め、官能的な生活の享楽と気晴らしという相互にまったく敵対するこれら二つの反対なことを妥協させようとしていたかのようです。」（Ｖ７・１７）と言っている。ことばを変えて言えば､彼女は念祷に忠実であることを望んだが､自分の気ままにしたがって生活することも望んだのである（Ｖ13・6）。神と被造物との間に引き裂かれたテレジアの魂の真のドラマ。彼女は告白して言

う。「どうしてあれをたった一か月の間でも忍び得たか、ましてこれほど長い年月の間忍び得たかわかりません」（Ｖ8・2）。彼女は一年か､あるいはそれ以上念祷をやめるに至った（Ｖ7・11;19・5）。のちに彼女はこのことを「生涯中のいちばん大きい誘惑」（Ｖ7・11）、「最も大きな危険」（Ｖ19・10）と称している。彼女の生活はこのために非常に倫理的スランプにみまわれた。「念祷なしに過ごした期間は私にとって命を失うよりも悪いものでした」（Ｖ19・11）、「念祷をやめることは真の転落です」（Ｖ15・3）と彼女ははっきりという。

1. 聖テレジアの回心へのプロセス

「私は生きたかったのでした。なぜなら一種の死のようなものに対して、絶え間なく戦うのは、生きることではないとよくわかっておりましたから。誰もわたしに生命を与えてくれる人はありませんでしたし、自分からそれをうることはできませんでした。そうすることのおできになるかたがわたしを助けにおいでにならなかったのは、至極、ごもっともなことです。幾度となく私をご自分にお連れもどしになったのに、私はいつも彼をお捨てしたのですから！」（8 章 12）。

1. 回心の時

「このような生活に私の霊魂は疲れ果て憩いを求めました。けれども、身に着けてしまった悪い習慣のため

に、それを見いだすことができませんでした。ところで、ある日…聖像が目につきました。それは傷にまみれたキリストを現わしたもので、聖主が私どものためにお忍びくださったことを、あまりによく思い起こさせましたので、私は、これを見て、魂の奥底から揺り動かされるほどの強い敬虔の熱情を感じました。これほどの傷が物語る測りがたい愛に、自分がどんなに悪い応え方をしたかを考えて、あまりに激しい悲痛に捕らわれ、私の心は砕けてしまうかのように感じました。私は、私の救い主の足元にひれ伏し、滝の涙を流し、もはや主にそむかぬ力を与えてくださるよう哀願しました」（9・1）。

1. テレジアが出会ったイエスのかかわり

「（ご苦難を絶えず黙想することの難しさは認めつつ）しかし、私たちが、復活なさった救主とともにいることをだれが妨げ得ましょうか？ 私たちは、こんなに近くご聖体のうちに、すでに光栄を受けていられる主を所有し奉っているのですから。…主は聖体の秘跡において、私どもの伴侶（とも）となり、あたかも、一瞬間でも私どもと離れていることはおできにならなかったかのようです…」（22・6）。

「あらゆる試練に際して、裁判官の前においでになるあなたを眺めるだけで、もうどんなことでも、最大の勇気をもってしのぶことができるようになりました。苦しみの道の先頭に立ってお進みになるこのように勇ましい隊長、このように献身的な友なるイエス・キリストといっしょなら、人はなんでもしんぼうすることができます。彼は私たちの支え、私たちの力であって、友としての務めを、なおざりになさることは決してありません。彼は真実の友です。私はそれがはっきりわかります」（22・6）。

1. 回心の結果の結論

「私は、次のように結論したいと思います。私たちがキリストのことを思い出すたびごとに、このように高い恩寵を私たちに給うことによって証してくださった主の愛と、私たちに対するそのご慈愛のこれほどの保証を、キリストにおいて与えるよう促す父なる神の、あまりに大きい愛を思い出しましょう。なぜなら愛は愛を呼びます」（22・14）。

1. イエスに真に出会ったテレジアの祈りへの招き

「念祷とは、私の考えによれば、自分が神から愛されていることを知りつつ、ただふたりだけでたびたび語り合う、友情の親密な交換にほかなりません」（8・5）。

「私は今あなたがたに、主を考えることも、たくさんの概念を作りだすことも、知性でりっぱな微妙な考察をすることも、お願いしているのではありません。ただ主をながめることだけをお願いしているのです。あなたがたが心の目を もしそれ以上できなければ ただ一瞬間だけ、この主に投げかけるのを、だれがじゃまできるでしょうか（C 26 章 3）。

…主はあなたがたをあの美しい情けぶかい目、涙でいっぱいの目でお眺めになるでしょう。あなたがたの苦しみを慰めるために、ご自分の苦しみをお忘れになるでしょう。それもただ、あなたがたが主のもとで自分を慰めようとしておそばに行き、頭をふり向けて主を見ているからなのです」（同 5）。

「主よ、ごいっしょに歩みましょう。あなたの行かれる所は、どこにでも私は参ります。あなたがおくぐりになる所は、どこでもくぐります」（同上６）。

【第三の時期】**：**第三の時期の初めは､神秘生活のはじまりと合致する。

出発点は決定的回心の行なわれた 1554 年。彼女はあやまちの機会をたち切り、もっと念祷に励みはじめ、神は文字通り彼女の上に身をかがめられる。彼女は幾度もこの二つのことの同時発生を指摘した。

「私が少しずつ危険な機会を避け､より多く念祷に身をゆだねるやいなや、みあるじはお恵みで私をお富ましになりはじめました。主は私がこれらのお恵みを心からお受けすることをお望みになるかのようでした」

（Ｖ23・2、cfr：Ｖ19・7;9・9－10）。

神秘的念祷のすべての形態とあらわれかたを注意深く読んでみると､心身両面にわたる現象と反響をこえて、神秘的念祷は、神の交流､人間への神のペルソナ的交流であって､その人はペルソナ的な一致に至るまで一回毎にますます内面的に深くこの交流を経験していくということがわかってくる。テレジアにとって念祷とは、「ペルソナとペルソナの関係」「友情関係」であることが、神秘的念祷からはっきりと浮かびでてく る。友情において､人､友人は絶対的な性格をおびてくる。その他のすべてはどうしても二次的なことになってしまうのである。

Ⅱ．「霊的な人々の母」（教会博士の称号）であるテレジアの招き

2001 年聖ヨハネ・パウロ二世は、使徒的書簡『新千年期の初めに』(33)において、現代の「時のしる

し」は霊性であり、いつもキリストとの出会いから再出発しつづけることの重要性を説く中で、現代を生きるイエスとの出会いを生きていく霊性の師として、十字架の聖ヨハネと聖テレジアを明記している。 この意味でも「霊的な人々の母」の称号をおくって、イエスとの出会いを生きようとする人々の母としての役割を担う聖テレジアの祈りの在り方は、注目に値する。

# １．念祷についてのテレジアの経験と念祷の様式

テレジアの祈りの様式、または方法について私たちのもっている証言はわずかではあるが明快で貴重である。

1. テレジアの念祷の方法
	1. 「私は､私の内部に臨在されるイエズス・キリストをながめて生活するようにできるだけの努力をしました」（Ｖ4・7）。
	2. 「私の念祷の方法は次のようでした。自分のうちにキリストをあらわすように努めました」（Ｖ9・4）。
	3. 聖体拝領の中で体験する祈りの意味：「主が本当に自分の貧しい家にお入りになったのだということを信じ､できるかぎりすべて外のことからこころを離して主と共にみずからのうちに潜みました」（Ｃ34・7）。
2. テレジアにとって祈るとは、

・キリストのペルソナに注意を向けること。

・それはペルソナ的出会いの場である霊魂の内部において。

・キリストと共にあること、キリストのことを考える､あるいは自分のうちにキリストをあらわすこと、

・キリストの現存をあらためて生きる、あらためて現実化すること。

・キリストのペルソナに自分を結びつけること。

1. テレジアの祈りの表現「私はそこで主のおそばにとどまっておりました」（Ｖ9・4）。

自分の経験を教えとして言いあらわそうとするとき､「主のおそばにとどまりましょう」（Ｖ13・22）。

1. 「潜心の念祷」念祷におけるこのやりかたを、テレジアは、後に「潜心の念祷」と呼ぶ

そして、この念祷の方法について「完徳の道」の中で断言する。

「主がこのやりかたを教えてくださるまでは楽しく祈るということがどんなことか決してわかりませんでした」（Ｃ29・7）。

さらに彼女は､豊かな幅広い経験から生じ､それによって養われた確信をもって､このやりかたをあくことなく勧める使徒となる。そしてこの教えを『完徳の道』26 章―29 章の中で総括することとなる。

1. 念祷生活と日常生活

念祷についての自分の経験から、テレジアは念祷と完徳を同列に置くまでに至る。念祷は「友情の交わり」なのであるから､念祷は生活全体とかかわりがある。念祷=イエスとの友情は全部を要求し、すべてを吸収する。祈るとは神を友人として選びとることである。

「もしも私がいくぶんなりともあなたが私に示しはじめられた御いつくしみにお応えしておりましたなら、私はあなたしかお愛しすることができず、この愛は私のすべての悪をいやすすべともなったことでしょう」（Ｖ4・4）。

生活は念祷の運命に従い､そして念祷は生活の運命に従う。私たちの念祷は何か？ いいかえれば私たちの神との友情は何か？ 私たちはこの念祷、この友情のとおりのものなのである。なぜなら祈るとは「友情をかわすこと」、「神との友好関係を実現し、深めること」だからである。

# ２．念祷についてのテレジアのメッセージ

念祷の経験からテレジアは念祷のメッセージへと移っていく。

祈りの定義「念祷とは､自分が神から愛されていると知りつつその神とふたりきりでたびたび語り合う友情の交換である」（Ｖ8・５）。

１

（直訳）「念祷とは、私の考えでは、わたしたちを愛していると私たちが知っているお方と

ひとりきりで交わりながら、しばしば一緒に居ながら、友情の交わりをすることに他なりません。」

☆この祈りの定義の特徴：

（1)断定的表現と主観的表現法の混在

（2)ペルソナ的アクセント

・祈りは、≪人間がその中で神と接しあう出来事≫

・何かの目的のための手段としての意味を持っていない

・祈りの機能という事からも解放されている

すなわち“何々のために神と友として接しあう”とか、“生活のため”、“徳を獲得するため・完全さを達成するため”･･･・などの目的のためのものではない

〈祈りは何のために役立つか〉と言う問いが吹き飛ぶはずの現実である。

（3)祈りはそれ自体として正当化される価値と意味として見られる。

（4）祈りの真髄は、｢ふたりのペルソナの間に交わされる友情関係の現実化｣それ自体の中に成り立っている。

（5)そのためにこそ｢友情を結ぶ事｣であり､友情の中で｢接しあう事｣に他ならない。

（6)祈りにおいて、｢大切なのは、多く考える事の中に成り立つのではなく､多く愛することである、という点を、よくご注意しておきたいと思います。ですから、さらに愛するようにゆさぶってくれるようなことをなすべきです｣(4M1･７)。

（7)｢耐える｣こと：友情に現実的に､効果的に耐える事、自分自身に耐える事､ありのままの事より他に何も友情にもち込むことのできないのを耐える事。そして､ちょうど神である友が､｢私のようなものを｣ 友情において耐えておられるように､そのようにその友に向かって自分を示すのを耐える事。

（Ｖ8・６）

（8)すなわち､自分の本当のことと､神の本当のことのなかでの出会いです。

テレジアのこの祈りの定義から出る明らかなこと､すなわち念祷についてのテレジアの概念の重みはことごとく、“今ここで”互いに向かいあって友情を生きているふたりのペルソナにかかっていることだけに注意をひきたい。テレジアの定義によれば､祈るとは自分のペルソナを出発点として神のペルソナに至ることである。迎え入れることと与えること､聴くことと公言すること、「交換」である。

神と人間に関する真理､神とは何であり､人間とは何であるかという真理の中での出会いとしての祈り

２

「完徳の道」の中で「念祷とは何であるか？」（Ｃ22 表題）と自問しながら彼女は自叙伝の中で与えた定義をくり返さずに､「娘たちよ､こうした真理をよく理解するのが念祷です」とその章の終りで意味ありげに言っている。この章をよく読んでみると「こうした真理」とは抽象的なことを意味していないことがわかるであろう。それは､神と人間に関する真理､神とは何であり､人間とは何であるかという真理である。本質的な出会い､「自分の本性を主のご本性に合わせる」（Ｃ22・7）ことに向けられた発見である。

これらの定義から見えてくる聖テレジアの祈りについてのメッセージ

1. テレジアは祈る者のすべての注意が神のペルソナに集中されることを望む。主のペルソナをながめること。「ただ主をながめることだけをお願いします。」（Ｃ26・3）「推理の働きを黙させて主が私たちを見ておいでになることを考えましょう。」（Ｖ13・21）主に何を申しあげるか､またそれをどのように申しあげるかは大して問題ではない。主のみ心をひくのは、私たちが「主と共にとどまること」現存の行為である。
2. 神のペルソナに注意を向けると言ったが、テレジア的なニュアンスをもってすれば、神の私たちに対する愛に注意を向けることである。

この愛は「自分が神から愛されていると知りつつその神と共に」という定義の中に要素として含まれている。念祷の師であるキリストの最初の教えは、私たちに対して抱かれる愛であるということをテレジアは注意深くしるすであろう。「もう（主の祈りの）最初の一句から、あなたがたはたちまち主のあなたがたに対する愛がおわかりになるでしょう。」（Ｃ26・10）自分が愛されていると知ること。これが愛に答えるための出発点である。愛は愛を呼ぶ（Ｖ22・14）。したがって万事において神の私たちに対する愛を考えなければならない。「主をもっとお愛しするのに助けとなることは何でもなさい」（１Ｍ1・7）。

1. 愛の中での出会い、これが念祷である。

そして真理、すなわち**神の真理と私たちの真理**の中での出会い。念祷の中で、神は私たちにご自身をおあらわしになり、ご自分の真理すなわち神は私たちを愛して与え、ご自分をお与えになるという真理を示される。「神は与えることをお好みになる」「神は与えあきるということをお知りにならない。」しかも「限度をつけずにお与えになる」「神は誰に与えることができるかとお捜しになる」これが、テレジアが念祷の中で発見した神である。誰かを知ることは―神についても同様である―その人と友情を結ぶことによってのみできるものである。

1. それから自分自身の発見。祈るとは、自分の内部に「入る」ことである。

「自分を知ること。」すなわち自分の豊かさ、みじめさ、自分の精神状態を知ること。私たちは「ただ一つのダイヤモンドあるいはたいへん透明な水晶でできているお城」である。私たちのすぐれた能力、とうとさ、美しさ。これが霊魂の城の入口で私たちを迎えるテレジアの最初のことばである。「神ご自身と語りあうことさえできるのです」（１Ｍ1・6）。

念祷は私たちの霊的状態を示してくれる。この自己認識について彼女は言う。「念祷の中で彼女は自分がどのように嘆かわしい道をたどっていたかを知りました」（Ｖ19・12）。「念祷の中で私は自分のあやまちがもっとよくわかりました」（Ｖ7・17）。

1. ペルソナ的出会いであると同時に念祷は「人を変える」出会いである。

念祷は新しい人間を生みだす。「友情を交わす」ことは、友情を強め堅固にすることである。これは聖テレジアがそのすべての著作において守り通す論旨である。自叙伝は、念祷は私たちを変えるという説を主張し、これを証明するために彼女は念祷の実りである自分の生涯を語る。この著作の内部構造がこの論旨に呼応している。「完徳の道」は、念祷は完徳への道であるというこの問題を再び取りあげ、「霊魂の城」は念祷を内面化の動き、神が住まわれる自分自身の中心に近づく動きとして示している。主との交わりを深めること。

1. 最もよい念祷とは、常に生活をもっと新たにする念祷である。

「私は徳に進歩させる念祷しか望みません。ああ、これこそ本当の念祷です！自己満足以外には何ももたらさないあの幾らかの霊的味わいは本当の念祷ではありません」（手紙グラシアン師にあてて）。

したがって真の念祷であるかどうかを知るには､生活をみればよい。神秘的念祷の場合もそうである。

「この念祷がはたして本当であるかどうかは､その効果と、その後の実行によってはじめてわかるもので、それをためすには、これ以上のよい試験台はありません」（４Ｍ2・8、参照：６Ｍ8・13）。具体的に、念祷がほんものであるかどうかを知るには､生活を調べればよいのである。「娘たちよ､自分が進歩したかどうか知りたいのですか？では、もしあなたがたのひとりひとりが自分こそ皆の中でいちばん悪い者と思い、又そう思っているということを行為で示して、他の方々の進歩と利益のお役にたっているならばそれが進歩の印です。進歩とは､念祷の間にいちばん甘美な慰めを味わうことでも、恍惚や示現や、あるいは主のお与えになるこの種のいろいろなお恵みを経験することではありません。そうしたお恵みの価値は次の世を待たなければわかりません」（Ｃ18・7）。

1. 念祷は友情の出会いであるから本質的に成長と発展へと向かう。

念祷とは何かもうできあがったものではない。念祷とは生きた現実、ダイナミックで絶えず進歩する現実である。 念祷を何か静的なものとしてしまわないで､かえって進歩の各段階にその人の念祷を積極的に用いるために念祷のこのダイナミックな面を浮きぼりにするのは特に大切である。

聖テレジアはいろいろなたとえを用いて念祷のダイナミズムについて語った。自叙伝の中では庭園に水をやる種々の方法､霊魂の城の中では神と人との間のペルソナ的関係の歴史における交流のさまざまの程度。この二つのたとえにおいて神と人間というふたりの主役者の定義の中に､ある漸進性があらわれている。神の働きが次第に大きくなり､人間の受動性もそれにしたがい､それと平行して大きくなっていくのである。自叙伝の中で聖女は、庭師（人間）の「仕事」は一段階進む度に少なくなるのに反してその「成果」はいっそうよくなると言っている。霊魂の城においては、念祷は内面に向かう動きとして示されているので、この出会いの行なわれるレベルがいっそう明らかにされている。すなわち神と人間とは奥の住居に進む度にますます親密な深いレベルにおいて「交わりをかわすのである（これが種々の住居の意味するところである）」。

1. 神秘的念祷は、テレジアの神秘の特にすぐれた領域である。

彼女は念祷についてしるされた多くの本の中にみられる欠陥を補おうとする（１Ｍ2・7、Ｖ14・7）。ことばをかえて言えば、普通沈黙につつまれているこの友情の交換の最も重要なこと、つまり神の行なわれることを言おうとするのである。いちばん主要な役者は神である。

そして、このように人を行動的な受動性の態度、受けいれるために聞く態度に導こうとするテレジアにとって、念祷とは根本的に人間の側からは聴くとき、神の現われのときである。顕現、おおいが除かれること。キリストは師、人間は弟子という完徳の道の叙述の横糸をなしているたとえをわからせるのはこれである。そこでテレジアは念祷のたびに主に近づかせる態度を示そうとして書いている。「このよき師のそばにおとどまりなさい。教えて下さることを学ぼうと堅く決心しておとどまりなさい」（Ｃ26・10）。神であるキリストは「念祷中に主のみ教えをすなおに受けようと望む者」を念祷の中で「お教えになる」（Ｃ6・ 3、参照２Ｍ1・3、４Ｍ3，Ｖ16・1、Ｃ28・3 等）。

1. 念祷における困難

念祷がこのペルソナ間の出会いの線におかれ、相互の愛のうちにおかれるなら、念祷の「修業」の中でいつも大きな重要性をもつ一つの「問題」すなわち「散心」と「無味乾燥」という問題が徹底的に解決する。散心と無味乾燥は確かに念祷を困難にするが、念祷の行為の妨げとはならないとテレジアはあくことなく私たちに言う。念祷は心理的な問題ではなく、神との生きた交わり（友情）の問題、対神徳（キリストのように考え、希望し、愛する）の行為である。「さまざまな心配や、世間的な考えにかき乱されていようとも」神と共に「いる」ことはできる（Ｖ8・6）。「ただ一つのよい考えを持つことができないにしても失望しないように」（Ｖ22・11、cfr.２Ｍ1・9）と彼女は何度も断言する。だからこそ「悪い考えを問題にしないように」（Ｖ11・10）というのである。「雑念が浮かんでも心を乱したり、それを気にしたりしてはならない」（４Ｍ1・11）。この第 4 の住まい 1 章７からは、じつに驚くべきすばらしいページである。

# ３．テレジアの念祷におけるキリスト

テレジアの念祷に関する叙述はどれも、この念祷のキリスト中心的な面を明るみにださずにはいない。キリストはテーマではない。キリストはなくてはならない存在（現存）あらゆる進歩の段階にどうしても必要な存在（現存）である。

テレジアの念祷は始めから終りまでキリスに集中していた（参照：Ｖ4・8；9・4）。人間であるキリスト

（Ｖ６）。彼女は「主と共にいることのうちに喜びを見いだし」（Ｖ22・4）、「全生涯を通じ、キリストに対してあつい信心をもっていた」（同上）という。初心者には「精神的にキリストのみ前に身を置き、その聖なるご人性に対する愛に燃えたち、常に主のおそばに生きる」ようにとすすめる（Ｖ12・2）。「このとうとい伴侶と共に生活することに努める者」を「進歩した者」と認め（同上）。

「キリストのご苦難とご生涯のことにたびたびもどるように、そこからすべての善が来たのであり、また来るのであるから」（Ｖ13・13）とすすめる。

神秘的念祷は、テレジアの念祷のこのキリスト中心的な傾向を更に強化する（６Ｍ8・1）。したがってテレジアは、霊的生活の全過程におけるキリストの人間性の現存に関する論争に、自らの経験からくる力強さと確信とをもって参加し、キリストの人間性はすべての善の道であり入口であると断言し、彼女自身に関しては「すべての善の源であるおかたからくる幸福でなければ何もいらない」（６Ｍ7・15）と言う。

テレジアの念祷のキリスト論的傾向はある決定的な出来事によって最終的に固められた。「主は知るべきこと、実行すべきすべてのこと」を教える「生きた本」または「まことの本」として彼女にご自身をお示しになったのである。キリストを対象とする一連の神秘的な恵み（示現・ことば等）がこの線を強め、キリストは彼女を霊的婚姻に導き、三位一体の神秘の中に引きいれられた（７Ｍ１・7；2・1）。

「キリストの上にじっと目をそそぐ」（１Ｍ2・11）ことから「霊魂の核心における主の出現」（７Ｍ2・3）に至るまで、念祷はキリストのうちに神と人間が明らかにされること、「キリスト化する」出会いとして展開していく。「ごいっしょに歩みましょう・・・」（Ｃ26・6）。

４．**念祷についてのテレジアの教育法：**念祷を生きる人となるために ―『完徳の道』に見るテレジアの念祷教育―

『完徳の道』は、テレジアの念祷を生きる人になるための導きとして特にすぐれた本

「念祷の道を歩もうと望む者」が獲得しなければならない「必要な事柄」の説明にひまどる

（cfr C16・1；17・1；20・1；21・1）

1. 教育法“真に祈る人になること”は“イエスに従って生きる人になること”―向こう見ずではなく賢明に

・祈ることを教えるのは、イエスとどう生きるか、あるいはどうあるべきかを教えること

・問題は技術を教えることではなく、人間を内面から造り直すこと

・祈る人をつくりあげ、念祷に精進する人のペルソナの面倒をみること

・テレジアはこのことに徹し、「友情の交換」、根本的徹底的に神を選び取る選択という彼女のくだした念祷の定義に対して論理的である

1. 真に祈る人となるために「必要な三つのこと」（cf.『完徳の道』4 章＝18 章）

・キリストとの間にずれを持っている私たちが“新しい人”となって、真実に“神の友”となっていく道を示す（4 章 4 節）。

「あなたがたがこういう自由を獲得するようにと私がこの本の中でこれほど強調するのを驚かないでください」（完徳の道 19・4、cf．32・9、28・12、自叙伝 11・1-4）。

① 相互の愛：利己主義・自己中心主義に陥りがちな在り方から、「相互の愛」に生きる生き方へ

神との友情の交換をもっと遠くまで押しひろげるために他の人々に心を開き、友となり兄弟姉妹として交わることをおぼえるようにとテレジアは望む。

・偏った愛の弊害の問題 ・「あの優しい愛の御方イエスが、私どもに対してお抱きになる」愛の在り方 ・共同体の秩序を全体的に理解して整備するより広い知識や経験の必要

② すべての被造物からの離脱（自由）所有欲に捕らわれがちな在り方から「すべての被造物からの離脱」分かち合って生きる生き方へ

— 綱（船を岸につなぐ綱のこと）を断ち切るように、所有しようとする「欲望」にうちかち、すべてから自由になるようにと私たちに勧める

— テレジアの愛なる神を選び取ることからくる、愛する自由の獲得体験（自叙伝 9 章と 23 章）

③ 真の謙遜：自分の考え方に固執しがちな傲慢な在り方から、「真の謙遜」天の父に聴き入って生きる生き方。神に私たちの生活の主役者となっていただくこと、どの道から私たちを導くべきであると－神に押しつけることも「勧める」ことさえせずに、神に導かれるがままになることを教える。

真理（本当のこと）を受け入れそれをもとに生きること。

1. 「決然たる決意」“determinada determinacion”についてしきりに語った。これは彼女の教育法の中心である。外部からの脅しや、「念祷は必要ではない」というある神学者たちのことばを押しきって堅い決意。また、けちでなかなか神に自分自身の絶対的奉献ということをせず「はじめには気前の良さを示しておきながら、あとですっかりけちになる」（Ｃ32･8）私たちの内心の無気力や疲れ、愛の道に入るのを妨げる抵抗を押しきって堅い決意。

聖テレジアのいう堅い決意とは、私たちを自分自身から解放して神に立ちかえらせて下さる御者に向かっての全存在をあげての飛躍。決意するとは神にたちかえること。つまりそれは純粋な愛、無償な愛を意味する。すでに彼女は念祷の道における初心者に次の掟を与えた。「念祷の道における初心者の目的は、自分自身を満足させることではなく、主をご満足おさせすることだけでなければなりません。」（Ｖ11･10）

4）「神と二人きりでかわす友情の交換」を生きる孤独の大切さ

「念祷──友情」に固有な本質的要求であり対神徳的なといえるこれらの念祷の前提または発端とともに、テレジアはこれに劣らず大切な他の要素を力説する。これを私たちは心理的な前提と呼ぶことができる。それらの中で**孤独がきわだっている。孤独は「神とふたりきりで交わす友情の交換」**という念祷の定義の一部分をなす要素のようである。友情は──そして人間的友情を神的次元に置きかえた念祷も 孤独の雰囲気を求め孤独をつくりだす。事実すべての念祷は一対一である。

私たちを孤独にむけて教育すること。孤独は祈る人となることができるために、ひとりのペルソナであるために必要である。孤独は種々の経験を強固なものとし、私たちの理解にこえる現実の諸点を発見するために必要である。孤独は存在の他の面を発展させるために必要である。孤独は「聴く」ため、私たちの理解をこえる自己の深層、知らないために活用しない自己の深層へと降って行くためである。孤独は自分が誰と共にいるかをわからせてくれる。孤独を習慣とすること。「あなたがたはひとりぼっちですから、どなたかいっしょにいる相手をお捜しなさい。ところであなたがたが今唱えようとするこのお祈りを教えて下さった先生以上によいお相手があるでしょうか？」（Ｃ26･1）一対一の念祷。それは誰をも避けることではなく誰かのほうに行くことである。不在ではなく現存である。

念祷と孤独を結ぶきずなは､テレジアが孤独を､念祷を識別するための基準としたほど強い。「真実に神を愛している人はいつもこのやみがたい孤独への望みを覚えるものです」（Ｆ5･5）。念祷における成長は孤独に対する望みの増大によってはかられる。物理的孤独。これについてテレジアは言う。「孤独に慣れるのは念祷のために大きな助けです」（Ｃ4･9）。彼女はイエズスのなさったこととその教えとをひきあいにだす。

「みあるじは孤独のうちに祈るようにとお教えになり､主おんみずからお祈りになるときはいつもそうなさいましました」（Ｃ24･4）。霊的孤独。主との出会いを根から腐らせるいろいろな「愛」や「現存」から身をひく孤独。霊的孤独は強い注意､神なる友にひきつけられてそのまわりをめぐる旋回、己が全存在をあげて彼と友にある現存である。孤独は「この中心から出なくなった」とき頂点に達する。人間にとって「本質的なこと」と「最良のこと」は「いつも主と共にある」ことである。霊的孤独は自己の内部に入ることなのである（７Ｍ1･11；2･5）。しかし、霊的に内部に入ることの究極の在り方は、『霊魂の城』第 7 の住まい 4 章（最終章）に記されているように、マルタ（人々をイエスのもとにお連れする隣人愛の象徴）とマリア（イエスに聴き入る観想の象徴）が協力し合って共に生きていることを生きることである。

この「霊的孤独」や「自己の内部に入ること」について：教皇フランシスコは、真実の霊性を求めて次のように指摘している事柄と、聖テレジアが目指す内面化とは真逆のことであることを注意深く受け止める必要がある。

「孤立、それは内在主義の言い換えであり、神を排斥した偽りの自立として表現されます。しかし、宗教界では、それは不健全な個人主義に見合った霊的消費主義として見出されます。現代を特徴づける、聖なる者への回帰とか霊的な探求といったものは、両義的な現象です。今日わたしたちが直面しているのは、無神論以上に、多くの人の神への渇きにふさわしくこたえるという課題です。人間性に欠けた提案や、肉を伴わず他者とのかかわりももたないイエス・キリストでもって、それに応えようとしてはなりません。彼らが、 交わりの連帯と宣教の実りへと招くと同時に、人間を癒し、解放し、いのちと平和で満たす霊性を教会の中に見出さなければ、人間らしさに欠けた、神に栄光を帰すこともない提案によって欺くことになってしまうでしょう」（『福音の喜び』89）。

# ５．霊的友情

「同じ念祷の修業を実行している人々との友情・交際を求めるように」とも勧めている。「念祷のわかちあい。」（Ｖ7･20-22，Ｃ20･4）祈る人びと まず第一に自分の属する共同体のメンバー との友情の交換は、個人的な念祷を守り強め、念祷へと教育する。

彼女は念祷の促進・維持・要求において驚くべき価値をグループに与える。「霊魂が見いだすことのできる唯一のくすりは､神の友である人々､つまり念祷の人と話すことです」（Ｖ23･4）。「これについて話すかたがたに接近することは非常に大きな助けとなります」（２Ｍ1･6）。

テレジアは姉妹たちが実行している一つの事を非常に喜ぶ。「ときどき皆がいっしょに集まっているとき､姉妹たちが大きな内的喜びにみちあふれて､主をきそってたたえるのを見るのは私にとって本当に特別の喜びです」（6Ｍ6･12）。

彼女が念祷を教える人を重要視するのも､このことと関連してである。彼女は賢明で経験のある先生なしに個人的念祷に進歩するのは不可能であると確信し､自分が望むようなよい先生がないことを嘆く。彼女の教えはこの欠陥をいくらかでも補おうとする。

Ⅲ.「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」（ヨハネ15・15）といわれるお方との友情の交わりを生きる念祷の道

**「**イエスとの友情を生きる霊性」の聖書的・教会的な根拠を探す。

１．旧約において自らの名を現わす神 （cf.「アレテイア」no.15 特集「神の名」1996 年）

1. エジプトからの脱出に同伴する神ご自身が、「わたしはある。わたしはあるという者だ」自らの名を名乗る

※「名前」はその人格への窓口の意味を持つ＝“名を名乗る”ことは、自らのかかわりの本質を現す

① （日本語訳）**「わたしはある。わたしはあるという者だ」**の意味を探して

（ヘブライ語）「エヒイェー・アシェル・エヒイェーエイエ」（英訳）「I am who I am」ヘブライ語の be 動詞は、「存在する」と同時に「存在させる」の意味も持つ

⇒その意味：「わたしはあなたに存在を与えながら、あなたの人生に深くかかわって共に在るもの」‥

⇒現代語訳の潮流：「わたしはあなたの人生に実在する者」/「わたしはいるのだ。確かにいるのだ」

⇒3 章 12 節「神は言われた。『**わたしは必ずあなたと共にいる。**』に収斂するといわれる。

② 「エヒイェー」の三人称単数「**ヤハウェ**（あのお方はある・あらせる）」、旧約聖書中 6823 回出る。

③ 「ヤハウェは、ユダヤ教の伝統において『主』（アドナイ）と発音されてしまい、ギリシャ語においてはキュリオスと訳され、日本語の聖書でも一般名詞のように『主』と訳されてしまった。しかし、ヤハウェは本来、救いを意味する名詞である。主は奴隷に対する「主人」という意味合いがあり、神の名にふさわしくない。聖書の神は、私達人間を救うという本質がある、ということを覚える必要があるのではないだろうか」（『アレテイア 』no.15 1996 年 特集『神の名』巻頭言 樋口進）。

④ 「イエス」は、「ヤハウェは救い」の意味

「インマヌエル：神は我々と共におられる」・「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」

1. 脱出にさいして「ヤハウェ」のかかわりを宣言する

## 「主（ヤハウェ）、主（ヤハウェ）、あわれみ深く恵みに富む神、忍耐強く、いつくしみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者。」（34 章 6～7 節）

←**出エジプト記 32 章、民が偶像礼拝に陥った後に告げられた、もう一つの「神の名」の宣言**

① この表現は、旧約聖書の定型句的表現となる。愛に貫かれているゆえに、民が滅びるに任せない神、罰すべきものは罰する神が表象されている。その人が崩れていってしまうことを放置しない神のかかわり。

② 「父祖の罪を、子、孫に三代、…」、人間の生き方の影響はひとりに留まることがなく、子供や孫へと伝わっていく。

③ 「神のいつくしみとは抽象的な概念ではなく、わが子のことで体の奥からわき起こる親の愛のように、神がご自分の愛を証する具体的な現実なのです。実に「はらわたがちぎれるほどの」愛ということです。この愛は深い自然的な気持ちとして心からわき起こる者出、優しさ、共感、寛大さ、そしてゆるしの気持ちです（『いつくしみの特別聖年公布の大勅書』6 番）。

# ２．新しい契約の「最後の晩餐」における神の最終的な名の啓示：私たちを友と呼ぶイエス

ヨハネ 13 章

「 あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる」（13・34-35）。

ヨハネ 15 章

「わたしの命じることを行うならば、あなたがたはわたしの友である。もはや、わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。僕は主人が何をしているか知らないからである。わたしはあなたがたを友と呼ぶ。父から聞いたことをすべてあなたがたに知らせたからである。（15・14-17）

◎イエスの掟を守り、イエスが愛されたように互いに愛し合って生きるならば、イエスは、「わたしはあなたがたを僕とは呼ばない。わたしはあなたがたを友と呼ぶ」といわれる。

わたしたちを友と呼んでくださる神の子イエスご自身は、自らを「わたしたちの友」とします。

「わたしたちの友であるイエス」これが聖書においてわたしたちに示された究極の神の名です。

３．「友情共同体」としての教会 （教皇フランシスコ使徒的勧告『キリストは生きている』）から

1. 「ある聖人が言っています。『キリスト教は、信じるべき真理、守るべき法規、禁止事項の一そろいではありません。そうなったら不快です。キリスト教とは、わたしのことをあれほどまでに愛してくださり、わたしに愛を求めておられる、あのかたのことです。キリスト教とはキリストのことなのです』」（156）。
2. 「友情はとても大切なものなので、イエスはご自分を友となさるのです。「もはや、わたしはあなたがたを

僕とは呼ばない。……わたしはあなたがたを友と呼ぶ」（ヨハネ 15・15）。主から与えられた恵みによって、まことにイエスの友になることにおいて、わたしたちは高くあげられたのです。わたしたちに注いでくださったのと同じ愛をもって、わたしたちはこのかたを愛し、その方の愛を他者にまで広げることができます。それは、彼らもまた、イエス・キリストによって築かれる友情共同体※の中に居場所を見つけられるはずだとの希望をもってのことです」（153）。

※聖トマス・アクイナス『神学大全』〔稲垣良典訳、『神学大全 16』創文社、1987 年、119-122 項〕

1. 友と語って、私たちは心の奥に秘めたことを分かち合います。イエスともまた、語り合えます。祈りは、挑戦であり冒険なのです！祈りによってわたしたちは、イエスをもっとよく知り、イエスの深層へと分け入り、結びつきをさらに強められるようになります。祈りによってわたしたちは、自分に起きたことをすべてイエスに伝え、その腕に安心して包まれるとともに、イエスがわたしたちにご自分のいのちを注いでくださる、親密で愛のある尊い時間を得ることができます。「あなたのなさりたいように」と祈ってあのかたの場所を用意したなら、「あの方は行動でき、立ち入ることができ、勝利を収めることができるのです」

（155）。

1. そうして、あのかたとの途切れない結びつきを生きられるようになります。それは、他の人と味わういかなるものにも勝るものです。「生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」（ガラテヤ 2・20）。あなたの青春から、この友情を抹殺しないでください。祈っているときでなくとも、あなたはその友情を感じるはずです。あのかたがどんなときもあなたとともに歩いておられることに気づくはずです。それに気づけるようになってください。そうすれば、いつでも寄り添われていることを知るすべ、素晴らしい経験を得るでしょう（156）。

結び：イエスとの友情を深め、互いに似たものとなっていく歩みとしての念祷

1. 念祷を生きる上での大前提

・「知っておくべきことというのは、どんな人の心の中にも、たとえ、この世における最悪の罪人であっても、神はその中に実際にましまし、その力となっておられるということである。この種の一致（実体的一致）は、神とすべてのつくられたものとの間にあるもので、これによって神は、そうしたものが存在できるように保ってくださっている。つまり、こうした一致がなければ、それらのものは、たちまち無に帰してしまうということである」（カルメル山登攀Ⅱ.5.2）。

**⇒**十字架の聖ヨハネは、この実体的な一致の状態から、対神徳（信仰・希望・愛）を生きながら、イエ

スを受け入れて、お互いに似た者となっていく道としての「相似の一致（変容）」へと招かれつづけていること、その一致へと歩みつづける道を示します。

・「（大罪を犯した状態について）これよりも濃い闇、これ以上、暗く、黒いものはありません。…霊魂にあれほどの輝きと美を与えていた太陽は相変わらず霊魂の中心にとどまっていられるのに、まるで存在しないのも同然になったのです」（『霊魂の城』第一の住居 2 章 1）。

「もし自分の状態がわかったなら、どうして、この水晶を塗りつぶしたチャンをぬぐい取ろうとして努力せずにいられましょうか」（同 4）。「ここで注意しなければならないのは、この泉、あるいは、霊魂の中心にあるあのきらめく太陽は、少しも輝きや美しさを失わないということです」（同 3）。

1. 念祷を生きること

これらすべてをふまえて、アビラの聖テレジアは、イエスとの出会いの場である祈りを次のように定義しました。

## 「念祷とは、私の考えによれば、自分が神から愛されていることを知りつつ、その神と、ただ二人だけでたびたび語り合う友情の親密な交換にほかなりません」（同 8・5）。

友なるイエスとの出会いを「愛は愛を呼びます」（同 22･14）と結論するテレジアは、あわれまれ愛されている者としてその愛に応えることが彼女の人生となりました。この祈りの定義が示す「イエスとの友情の親密な交換」を真実に生きる者となるために、具体的に生活の中で、イエスと共に、隣人と愛しあい（相互愛）、イエスと共に何も自分のために握りしめず、自らを分かち合って生き（離脱）、イエスと共に御父に注意深く聴き従って生きること（謙遜）へとわたしたちを導きます（参照：『完徳の道』）。

【参考文献】

・トマス・アルヴァレツ著

田中輝義訳 『城の中へ』 内住の聖三位に向かって （ドン・ボスコ社 1989 年）

・トマス・アルヴァレツ著 松田浩一訳 『イエスの聖テレサ』 霊的な人々の母 （サンパウロ 2010 年）

・東京カルメル会女子修道院/ホアン・カレット編 『あなたのために私は生まれた』 聖テレサの生涯とことば

（ドン・ボスコ社 2014 年）